日本大学薬学科

桜薬会会報

5

目　次

□新生“日本大学薬学部”に望む(1)／曙光／大林温…2□製薬企業に従事する一員として／久藤一馬…2□大学に対する注文／孤塚識夫…3□生物薬学系の充実を／高仲正…4□力の結集を／中村健…5□医療薬学を／藤井忠男…7□薬学に思う／藤原充雄…8□教育現場から／町田実…9□報告／学部昇格についての現況と展望（その2）／桐沢誠…10□55年度総会未開催についてのお詫び／石田隆夫…10□昭和54年度決算及び55年予算について／事務局…11□教室だより…11□駿河台コミニュティー／卒業20周年／五期生…21□伝言板／石松先生出版記念会…22□薬学科就職委員会より…22□山形よりの御案内…23□会費納入についてのお願い／財務委員会…23□会費納入者名簿…23□編集後記…24

新生“日本大学薬学部”に望む（１）

曙　光

大林　温

老易く、学成り難きは人の常、早いもので日大薬学科も創立以来¼世紀を経てようやく薬業界にもその基盤は確乎として築かれつつあることは、慶びに耐えません。その蔭に5,000余名に及ぶ同窓生が、それぞれの分野で懸命の努力を積み重ねてようやく今日の薬学科を支へて来た事も確かだと存じます。幾多の歴史的経過と、それを支えて来た学内教職員の悲願によってようやく薬学科の“部”への昇格が具体的スケジュールとして軌道に乗る迄に到達しました。机上プランから実行計画まで、更に構築物、教育設備及び教授陣等スタッフの充実、大学院の設置にまで、その財政的裏付を伴う仕事は将に一大事業であろうかと想像しています。その中で一同窓生として吾々に何が出来るかではなく、何を成さねばならぬかが今問われているものと思います。同窓生5,000余名のそれぞれの意志が薬学部昇格に献身的に凝集される時にこそ、この大事業は成就されるものでしょう。それ以外に誰がこの仕事を引受けてくれるでしょうか。現在薬科大学など薬学教育機関全体からみますと吾が日大薬学科の理工学部中の一学科としての薬学科の存立基盤や財政規模又は学際的研究評価或は薬学受験生側から見た魅力は決して充分満足出来る程成熟してはいないと思います。又今後薬局の開設やその経営上必ずしも薬局の将来はバラ色だとは申せませんので今迄の様に薬学受験生が常に盛況だと考えられる根拠は何もありません。この様に将来を展望すると日大薬学科から日本大学薬学部への昇格を何としても実現させる為に、今この機会を逸しては吾々に未来はないと云っても過言ではないと信じます。又日新月歩の科学にあって特に生命科学の立場から薬学をみるとき、臨床薬学つまり薬の使い方に関する Science を含めて治療学への薬学の接近が大変に遅れている事と痛感します。薬学側だけではこの分野の発展は成立しません、必ず臨床医師との Mittarbeit が必要です。医薬分業の概念を医師にも理解させる事も基本的要素です。しかし常に専門的知識をもって臨床に活躍出来る薬剤師の育成は Drug information の提供と相まって今後社会的要請にもなりましょう。コルベンの中での薬物。反応に主に目を向けて来た今迄の薬学専門教育から人間のしくみに薬物をどうかかわらせて治療の最大効果を期待出来るのかを見極める仕事が臨床の場で要求されるのですから、幸い総合大学としての機能を備えている日大にあってその利点を存分に発揮出来るまでに名実共に新生薬学部が実力をつける迄関係者及び学生が総力を出し合って頑張る事で新生日本大学薬学部の輝かしい栄光が約束されるものと信じています。　　（31年卒　健康堂薬局）

製薬企業に従事する一員として

久藤　一馬

久しぶりに桜薬会会報を手にし、会長の「巻頭言」から、日本大学理工学部に薬学科が創設され25回の卒業生が社会に送り出されたことを知り、大変感慨深いものを覚えました。

私共第一期生を、社会に送り出すための当時の担当教職員諸先生のご苦労は、大変なものであったと思います。とにもかくにも、何とか無事に卒業し、仕事の方も25年間私なりに頑張って来ました。先生方にとっては、当時、先輩のいない私共を社会に送ることに際しては、大きな不安をお持ちであったことと思います。

ここ数年来の、製薬企業に対しての社会一般より求められる諸条件を比較すると、当時の業界は全く

比べものにならない程、緩やかな感じでした。と言いましても、それは入社当時の私の一方的な感じ方でありまして、会社諸先輩の苦労も推察出来ずにいたわけですから、おしかりを受けるかも知れません。どちらにしても、くよくよしない私の性格故か、会社では、やりたい事をやって来たように思います。しかし、そのような時代においてさえ、学問の面での仕事の行き詰まりは度々生じ、解決方法を捜すのに四苦八苦することがありました。

近年、医学、薬学の進歩は大変目覚ましく、私共企業で働いている者にとっては、追い付くどころか取り残されない様に努めるのが精一杯と云う状態であります。社内では、研究・開発部門、生産部門、営業部門と業務を分担して、全員で頑張ってはいるものの、現実は大変厳しいものがあります。

この様な私共にとって、母校に何を望むかと云えば、それは、より充実した薬学に関する基礎的な知識を修めた学生の育成と、それに必要な設備であります。

製薬企業に従事している私自身にとって、自分が、今一番悩み、不足し、行き詰まっている事についての知識を充分に持ち合せた後輩が育つことが、私の最も待ち望んでいることであります。企業の将来は、医薬品の安全性を巡って、現在よりも厳しい状況におかれることは、必至であります。法的規制と行政指導の面での強化は当然のことでしょうが、医薬品の安全性のために、企業としての厳しい対応が必要となって来ております。私共企業に従事している者にとっては、このことが第一の急務となるわけであります。行政面においては、現在医薬品の再評価が実施されており、又薬事法の改正が行なわれ、医薬品の製造管理、品質管理についての規則（ＧＭＰ）が法的に定められたことや、医薬品の安全性に関する規制（ＧＬＰ）、更に流通上の管理（ＧＳＰ）についても具体的にまとめられることになっております。また、従来の営業マンが単なるセールスとしての活動ではなく、学術知識を備えた医薬品情報担当者として活躍できるよう、業界の自主的なプロパー資格制度が設けられることになっております。昨今の製薬企業又薬業界は、急速に変化しつつあるわけであります。

この様な状況下にあって、大学においての薬学教育の在り方が再検討されることは当然と考えます。滝戸主任教授のお言葉にもありますように、時代の推移と共に、従来薬学で学んだ科目だけでなく、医学、臨床薬学、薬害問題等を含めた幅広い知識を持った学生の教育が必要となり、又そのことは、製薬企業の立場においては、薬学生に要求せざるを得ない現実となって来ているわけであります。

私共は、日本大学薬学科が薬業界のみならず、薬学のあらゆる分野へ卒業生を送り出すに当り、時代の変遷に対応し、現状の要求に答え得る学生を、一刻も早く生み出してほしいと願うばかりであります。そのためには、大学院設置が最も優先する課題であり、その条件として、薬学科の学部昇格が先行すると考えます。第四号会報によります教職員諸先生の大いなる努力で、今後の日本大学薬学科の発展のための基礎ともなる学部昇格、そして大学院設置が一日も早く実を結ぶよう、卒業生として切望する次第であります。

（31年卒富士臓器製薬ＫＫ　取締役・製剤管理部長）

大学に対する注文

孤塚　識夫

桜薬会から「日本大学薬学部にのぞむ」を書けという突然のご依頼を受けたが、正直なところ学部になればどのような利益があるのか、現行の薬学科のまゝでどんな不都合があるのか、とんとその方面に明るくない私にとっては十分な判断材料を持ち合わさないので不適という他はない。しかし大学に対する注文ならいろいろあるので、それを書くことにする。要は容れるものゝ形がどうあれ、問題は中味にあると思う。専門分野における新しい研究と、学生に対する教育指導が大学教育の大きな二本柱であることはいう迄もない。各種学会における最先端での研究発表と並んで国家試験の合格率などは世間一般の評価基準となるだろう。各種の学会に参加することの多い私にとって学内にいる卒業生からの研究成果の発表に出合うことは極めて少ない。統計を取っ

たわけではないのでどの位少ないと明言できないが余り目にふれない。しかし学外へ出た本学出身者たちの報告は、総ての人を知っているわけではないが、時おり目につく。要するに本人の能力とか学問に対する情熱などという問題ではなく、研究発表を行う環境が十分でないと考えるのが自然であろう。そうかといって学生たちの指導にばかり手を取られすぎているのでもないらしいことは、国家試験の合格率を見れば明らかである。これらのことは日常の研鑽の中にしか生まれないし、これらの評価が大学の値打ちを表わす絶対的なものであると同時に基本的なことでもある。このように数式に当てはめた結果を期待する一方、何らかの特色づけも学生の人気を高め良質の入学生を穫得する一つの策である。特に本学出身の諸先生方に一層の発奮をお願いしたい。

われわれの日大薬学科は、理工学部の前身工学部に設置されたが、その理由もこの辺りにあったのではあるまいか。医薬品の製造工学に中心を置くような行き方が貫き通せれば、今頃はユニークな校風が確立できていたのではないかと惜まれる。当然のことながら、この薬学部昇格の論議も生まれて来なかったであろう。しかし皮肉にも薬学のこの30年の歩みをみると、一方的に公衆衛生や臨床医学寄りの道を進んでいる。これは抗生物質の誕生による徴生物、生化学分野の目覚しい発達に負うところが多いのであろう。いずれにしても、物としての化合物を生み出す合成や、薬品製造が軽視される傾向にあるようだが社会で実際に求められているのは、研究分野から製造分野へ（云い換えれば実験室から工場へ）の橋渡しのできる技術者であることを考えれば、この方面も一つの特色として力を入れてほしいものである。

世間の医薬品に対する見方も、われわれが実社会に参加した昭和31年以来、驚ろくほど変化している。それに対応して薬業界も、36年のサリドマイド事件、40年のアンプル入カゼ薬事件などを背景に、42年には安全性を重視した製造承認の厳格化、46年の薬効再評価、51年のＧＭＰ実施など、失いかけた医薬品への信用をとり戻すのに懸命である。このようなとき、高い倫理性を持って医薬品の物としての特性を理解できるような薬剤師が求められるようになって来ている。是非とり上げてほしい教育要素の一つである。

学部単位に基盤を置くといわれる日大にとって、学部昇格は重要な問題であり、先生方の力を合せて実現し、将来計画に向って邁進してほしいものである。われわれ同窓生にも判るような現状分析と将来計画が示されれば多くの理解ある賛同が得られるものと確信する。同窓生との連携を保ちつつ在野の実積ある先輩たちを公正な評価にもとづいて受け入れ得るような懐の大きさも学部の基本計画の中に加えてほしいものである。

良い伝統を受け継いでこそ独特の色彩が持てるものであり、歴代の主任教授が苦心された薬学部創りに信念を持って実現に前進してほしいものである。社会の求める卒業生を一人でも多く世に送り出すことこそ、日大薬学部の使命ではあるまいか。

最後に、学外の人間にとって、大学内部の複雑な諸事情もわからず、勝手な論述に終ったことを、お許し願いたい。（31年卒マルホＫＫ営業本部長）

生物薬学系の充実を

高仲　正

“新しい薬学部に望む”というテーマは大きすぎ、教育の場から離れて17年も経った私には確かな考えも浮かばないが、現在までの仕事を通して感じる事を述べさせていただく。

昭和28年に日大薬学科に入った頃の入学案内には「製薬技術者を養成するもので、薬剤師の免許も取れる」という意味の事が書かれており、私にとって魅力のあるものであった。しかし、卒論の教室を選ぶ段になって合成（辰野　教授）、生薬（木村　教授）、薬物（小澤教授）と迷ったあげく、「今後は薬理学がより重要になって来るから薬物学教室へ行こう」と誘われ、以後現在までそれが続いている。当時、薬学で薬理学教室があり、薬学出身の教授が主宰していたのは日大と東大だけであったように思う。従って、薬理学の中で薬学の占める位置は医学部に

早く追いつけという時期であった。日本の薬学の流れを振り返って見ると、戦前から戦後にわたっては外国で開発された医薬品を巧みに導入、製造することが主力であったようで、従って我国の薬学は有機化学を中心とした分野が優先していたとも思われる。

その後、医薬品の自社開発の必要性が増すと共に、有害作用に関する検討も進み、昭和42年に「医薬品の製造承認等に関する基本方針」が実施されるに及んで、医薬品の開発には毒性試験を含めて実験動物とヒトについて膨大な試験が行なわれる様になって来た。これに伴って前臨床部門ではヒトへの外挿を考慮に入れた動物実験に関する知識が、また臨床試験の立案、評価については臨床医学に関する知識が要求されて来ている。また、学会でも薬学会の薬剤学部会を例にとると、昭和39年には化学系の演題が80%以上であったのに、49年には約50%となり、54年には生物系の方が多くなっている。なお、54年には有機化学部会にも化学構造と生物活性の相関に関する演題が40題以上報告されている。さらに、病院等においても臨床薬学という言葉が生まれ、薬学出身者の臨床への関与が増えている。米国でも Doctor of Pharmacy という制度が出来、この取得者のうち病院等に勤務する者はＤＩサービス、薬歴の作成、薬物治療計画の立案と追跡、服薬指導等を行っており、相当な医学的知識が必要であると思われる。このように、昭和30年代以降薬学出身者への要求は、より有効な医薬品の開発と共に、ヒトへの適用を中心として薬の持っている生物活性の解明と疾病に対する適確な使用の確立に向けられて来ていると考えられる。

一方、我国の医学教育は米国等に比べて基礎から臨床までオールマイティの医師を作る事を目的としている様であるが、臨床では診断学が治療学に比べてより系統的にまとめられていると云われており、系統的により巧みに薬を使用することが今後ますます重要となるであろう。従って、この面への薬学の関与も今後増加することが考えられ、そのためには現在の概論的なものではなく、生理、解剖、病理、診断学等に関する充分な知識が必要となる。さらに、近年医薬品等以外の一般化学物質についても安全性の面から毒性試験を行う気運が高まっており、この方面にも薬学出身者の活躍の場が広がることが予想され、実験に繁用される動物に関しての広範かつ詳細な知識が必要になるであろう。このように、薬学は「作る薬学から、作りかつ使う薬学へ」と変って来たと考えられる。

薬学は高度な応用科学であり、薬は主としてその薬理作用を期待してヒトや動物に適用されるものであることを考えれば、薬学教育においては生物系を中心に学際領域の講義をより一層充実させる必要があると考える。さらに、その対象を医薬品以外の化学物質全般に広げ、非臨床試験等を通してより安全な使用を考えるのも薬学の分野となるであろう。

日大薬学科は工学部に設置されたという特色があった。新しい薬学部は総合大学の薬学部として、理工、医、農獣医学部等と密接な関係を保ち、可能な限り各専門分野のスタッフを充実させ、開かれた薬学部を考えてはどうであろうか。作りかつ使う薬学として、医薬品の開発からその有効かつ適切な使用に到るまでの過程をふまえて、より実際的な教育を強化すると共に、数10年後の薬学のあるべき姿を考え、特色ある目標を樹立してそれに向って発展されることを祈るものである。

（32年卒　国立衛生試験所薬理部末梢薬理研究室長）

力の結集を

中村　健

日大薬学科ＯＢの私達にとって、最近の朗報は、母校薬学科が薬学部として新発足する準備が着々と進められていることである。

日大薬学科の設立後、数多くの薬大が新設され、それらが年々充実され、大学院まで設置されて多くの新ドクターを世に送り出している姿を見るにつけ、ひそかに母校の進展を願うOBの心は強いものであった。

かかるとき、薬学科教職員のひたむきな努力のかいあって、近時、「薬学部設置検討委員会」が本部に設置されるに至ったことは、私どもOBにとって誠

に喜ばしい限りであり、改めて関係教職員の努力に深い敬意を表したい。

高校球児にとって、甲子園出場が悲願であるとすれば、桜薬会々員にとって薬学部の発足こそ、永きにわたる悲願であった。

かような時期に、今般、桜薬会の会誌委員より、「日本大学薬学部に望む」と題しての投稿依頼を受けた。

職業がら、各薬大の教授と接したり、各大学を訪れる機会も多く、また、職場でも多くの他薬大卒の人々と接している私である。

したがって、日頃より、概念的には他大学と比較して母校も、「こうあって欲しい」「あゝあって欲しい」と思うことも多々感じていたので気軽に本稿の依頼を引き受けた次第である。

通常、文章作りは、役人生活も長いので余り苦にならない筈であるのに、さて、締切日も近づき筆をとった時意外にも筆が進まない。

考えているうちに、なぜか、そのいいわけが、本題のテーマそのものに結びつくような気がしたのである。

以下、思いつくまゝ、そのいいわけを述べてみたい。

私事になるが、私ども役人生活においては、日常的に、新聞などマスコミや、国会、また各種の市民団体より、強いおしかりや、改善要求をつきつけられている。

それらの主張は確かに一面から見た場合は誠に当を得た主張であることが多い。

しかし、多くの場合、政府としても決して無為無策で時を過してきた訳でなく、当事者は真剣に取組んでいたのである。誰しもが満足する解答は、経済面から、マンパワー面からみてもともと無理な話なのである。したがって、多くの場合、許される範囲内での最善策をとるのが通常の姿である。

さて、話を元に戻すが、現在の母校のおかれている立場こそ、正に、これと同じであるに違いないと思はれることである。

すなわち、「あれもしたい」、「これもしたい」しかし、それには、「人がない」「金がない」「時間もない」という学校当局の悩みが、私の体験からみて筆持つ私の脳理に浮んでくるのである。

それというのも、私は卒業以来、桜薬会の役員として、20年を越す長い間、外からではあるが薬学科の進展の歴史を含め、眺めてきたからである。

ほとんど家をねぐらにするのみで、終日学校で学生指導に情熱を燃やしている諸先生の姿、その余暇をみつけて研究に励む姿、限られた研究費の中での研究をなされている姿等々が目に浮かぶのである。

したがって当初頭に浮んだ無責任な主張は、たちまちに現実離れの主張として頭の中にはね返ってくるのである。

かって、OB である教職員と、よくこのようなテーマで話し合うことも幾たびもあったが、その時の彼らのひたむきな情熱が私をして、このテーマの筆をにぶらせているのに気がついたのである。

さて、そこで私としての結論を急ごう。要は、細かい対策についての手法は、一番学生を知り、学校を知っている諸先生におまかせすべきである、ということである。ただ願わくは、日大薬学部をどういう大学にしたいのか単なる薬剤師予備校にすることのないようにするにはどうすべきか、いいかえれば日大薬学部の独自性は何かという大きな目標というが哲学だけは確立し、その方針に向って各先生方の力を結集していただきたい。

かって、薬学科を工学部に位置づけし、特色ある薬学生を世に送り出した創立時のカラーは、それなりに社会において評価されてきたと考える。したがって、今後、部として独立したときの日大薬学部の特色というものを長い将来を指向して確立することをこそ、先生方にお願い致したい。

なにか、依頼原稿の主旨から若干はづれ無責任な発言となったことにいさゝか恥じている。

聞く所によると諸先生方は、薬学部設立時の準備資金に当てるため、数年前より、月給中より数%を天引し積立てていると聞く、この学校を愛する教職員の熱意は、我々 OBの胸をうつものである。

母校を巣立った我々ＯＢもこのような先生方の努力を決して無にはしない筈である。終りに、我々ＯＢも今後一致団結し、永年の悲願に側面からの協力

をおしまないことを強く表明して筆を止めたい。

（33年卒　環境庁保健室長）

医療薬学を

藤井　忠男

病院の薬剤部長なる仕事をしていると、接客業かと思えるほどいろんな方々にお目にかかる機会に恵まれる。初対面の約半数の方から「御卒業はどちらですか」と問われる。昔々駆け出しの頃は「日大です」と答えると、「創立何年になりますかね」でチョンだった。近頃は風向きがよければ恩師の話、同窓の近況などが伺えることもある。風向きがよいのは、それなりに母校の評価があり、卒業生の活躍が認められてのことだろうと勝手に決めこんでいる。

母校の評価が上れば、われら校友はその恩恵に浴し、一方では優秀な人材の母校志望が促進される。これらの人材が卒業することによって、更に校友の活躍は増幅される。こと左様にうまい事ばかりでもあるまいが、ともかく、母校とわれわれ卒業生は持ちつ持たれつの関係にあり、このサイクルがより効率的に回転するためには、卒業生の活躍のみではどうにもならず、根本的対策は、母校のより一層の充実が図られなければならないことである。若し現状のまま手を拱ねいて放置するならば、目覚しく充実しつつある他薬系大学に水をあけられ、母校薬学科の存亡にも拘わる問題であると考えるのが大方の結論であろう。

それには、人と設備の充実、即ちわれわれが熱望してやまない薬学部への昇格と、大学院の設置を実現しなければならない。

翻つて、われわれの周囲を見渡すところ、数多い薬系大学の中で、薬学科は、広島大学医学部薬学科と、わが日本大学理工学部薬学科の二者のみであることに愕然とする。かってはそのすべてが薬学科であったが、薬学の進展に伴い、その広く深い学問範囲をカバーし、独自の学問体系を確立発展させるために、薬学部へと急速に展開した必然性を見ることが出来る。

このことは、一般社会通念からすれば、薬学科は学部に比べて一段ランクを下げるものと解釈されないこともなく、経済低成長などの多くの素因を包含する将来社会を考えるとき、入学志望者の減少や質の低下があり得ないとは誰もが断言出来ないところである。

また、総合大学であり、90年にわたる努力の結果、今日社会に評価されている日本大学の中で、薬学のみが二流のラベルを貼られかねないことは、日本大学のイメージにも関わる問題でもある。

このように考えるとき、困難な問題が多々あろうが、なにはさておき、薬学部昇格へ向けて最大の努力を尽さねばならない時であろう。

母校薬学科教職員一丸となって御努力中と承わっている。大学本部も本腰を入れつつある様子、物事には潮時というものがある。この機会を逃すことなく一気呵成に長年の目的を達成させたいものである。

さて、薬学部昇格への必然性と願望をくどくどと述べたが、石田桜薬会々長から戴いた標題は〝日本大学薬学部にのぞむ〟であり、これは間もなく実現するであろう薬学部に対する要望と受けとめられるこれは取りも直さず薬学教育そのものに関わる問題であり、薬学教育に直接タッチしたことのない私にとっては、一医療人として、自己の職能を通じた医療の場における薬剤師教育は論じ得ても、薬学の歴史、現状を広い視野で捉え、薬学部のあり方、将来像を論ずる能力は持合せていない。従って、ここで薬学教育論をぶち上げる気は更々ないが、自分の身近なところで考えさせられる問題が一つある。

それは、近年の医薬品の急速な開発に対して、これを適用する医療が、薬物療法面において完全消化出来ない現状である。これを打開するためには、医師による医学に立脚した一方的な医薬品の選択、そのソフトテクノロジー面の展開に対応して、薬学の基盤に立つ薬剤師の参画、協力態勢が必要なことである。われわれ病院薬剤師はそのような素養なしに対応せざるを得なかった悲哀を、今日痛切に感じている。従来からの基礎薬学教育はなくてはならないが、加えて、医療薬学に関する内容も多少なりとも盛込んで欲しいと考えている。

更に、われわれ社会にあって期待するものがもう一つある。それは学位取得の問題である。現在の職を保持しながら、学位取得を可能とする道を学部大学院に配慮願いたい。他薬系大学で研究生として席をおき、職を全うしながら学位を取得される方々も多くなった今日、このような制度を母校日本大学薬学部にのぞみたい。

（34年卒　東海大学病院薬剤部長）

薬学に思う

藤原　充雄

薬学生の製造部門への進出を旗印にスタートした理工学部薬学科が理工学部から独立して学部へ昇格する話がようやく具体化してきたことは非常に喜ばしいことです。有機化学の発達と共に歩んできた薬学が本来の医療への貢献に見覚めて臨床薬学が重要視されている現在、学科から学部へ昇格することはまさに絶好の機会だと思います。私は卒業後、企業の有機合成化学研究室で10年間を過し、その後薬理研究所に移って薬物代謝関係の業務に従事して８年になります。したがって、私の考えは研究者の狭い視野だと御指摘を受けるかもしれませんが、私は今の薬学は我々の時代よりはるかに医学に接近した教育がなされて然可きだと感じています。

数年前、境界領域の科学と云うことがよく話題になったものです。薬学は云うまでもなく医学と理学との中間に在って、社会に貢献する点でまさしくその一つに該当しております。医学に欠ける有機化学の知識と技能、および理学に欠ける薬理学的な知識と技術、この両者を兼ね備えている点で薬学への期待は大きいのです。しかし、薬学生が医学と理学の両領域の中間で広くて浅い知識修得にのみふりまわされていては残されるものは便利屋としての役目だけになってしまうことを恐れます。とは云っても所詮、医学、理学を無視した薬学は有るべくもありません。したがって、新しい薬学部には、境界領域の立場を充分に発揮し、薬学本来の目的である医薬品を接点とした医学領域に重点を置いた教育を期待したいと思います。総合大学の利点を充分に発揮し、医学部との連携体制を計り、現代医学が何を薬学に求めているかを知り、一方、今の薬学が医学の分野で新薬開発のみならず臨床分野等で如何に協力が出来るかを医学に認識してもらうこと。さらには、薬学は薬のことを教育するだけでなく、それを用いる患者、すなわち人間のことについて医学部と同様に詳しく知ることが重要な課題ではないでしょうか。

薬学科において有機化学教育の特殊性を取り入れた過去の方法論は立派だったとは思いますが。現在の社会での医薬品の置かれている立場、すなわち医薬品の有効性、安全性に対する評価が一段と厳しくなっている昨今、薬学は製造する学問だけであってはなりません。例えば、種々の分析機器の発達に伴い、これを取扱う技術の修得のみならず、そこから得た情報を医学と共に考え、医療の発展に寄与する基礎の確立にもっと精力的になるべきです。

しかしながら、薬剤師国家試験の受験資格は薬大出身者に限定されておりますので薬学教育は国家試験を目標とせざるを得ず、特に私学における試験合格率はその大学の格まで決めてしまう傾向にあることは留意しなくてはなりません。また、最近薬学教育年限延長が特に問題として取り上げられており、「獣医方式」の導入が提言されていることも無視できません。これは従来の４年制では現代科学の目まぐるしい発展についてゆけなくなりつゝあることを意味するものです。薬学は増々細分化され、一つの分野を把握することだけでも大変なことですが、実社会の要求は増すばかりです。単に国家試験合格率上昇を目的とした守りの薬学教育だけでは他の大学に追いつき追い越すことは難しいことです。理工学部薬学科の歴史を基礎にして学部独自の目標をかかげてもらいたいと思います。学部として独立するには、理工学部の薬学と云う特色を失う点、お茶の水を離れて地の利を失う点など確かに大きなdemeritも伴いますが、兎に角、今は一日も早く薬学科が学部へ昇格し、その第一歩を踏み出すことを切望しております。

（37年卒　田辺製薬㈱薬物代謝研究所主任研究員）

教育現場から

町田　實

他大学で薬学教育に携っている１人として一言述べてみたい。

昭和37年、本学薬学科を卒業し大学院生をふり出しに助手～助教授と北大・薬学部で13年間お世話になった。当時、薬学教育よりも研究に追われ〝薬学教育と国家試験〟に関することには恥しいながら無頓着であった。

昭和50年、新設の私立大学（東日本学園大・薬学部）に着任し薬品製造化学教室を担当するようになり国家試験と薬学教育のあり方を真剣に考えるようになった。それは各薬科大学が薬剤師を生み出す義務を背負わされているからである。さらに薬剤師に対する社会的要請が多様化してきて薬学教育者の認識と社会的要請の間に大きなギャップが生じていることを我々が素直に認めなくてはならないと思われたからである。

このような観点から新しい薬学部に期待したいことは、現行の国家試験によって薬学教育がゆがめられることなく、基本的なことを基礎に将来それぞれの職能にふさわしい能力を発揮出来る可能性を与える教育を実現していただきたいことである。〝薬剤師国家試験イコール薬学教育あるいは薬剤師職能教育〟と短絡した考え方では将来の薬剤師像を明るくするものにはならない。一般論として従来の薬学教育における医療面での教育の欠除が問題にされ、それが時として「有機化学偏重」と言う批判となって現われる場合があった。しかし有機化学的知識なくして、たとえば薬物の構造と活性との相関、生体成分、代謝産物の生体内変化、生体内における薬物の動態等々を理解することはできない。有機化学的知識を基盤とし、さらに薬物の医学的応用の基礎となる生物学的知識を備え合せることが必要なのである。そのような教育が日進月歩の著しい医療の場および保健、衛生の場あるいは医薬品の創製、生産、管理、評価等の場において生ずる諸問題に的確に対応出来、医薬分業時代にも十分耐えられる薬剤師を生み出す基礎になるものと思う。

薬学部として理工学部から独立することにより、１年次からの系統的な薬学教育が可能となる。早期に医療の場に接する機会を与え、学生の学習意欲を高めることも必要であろう。また薬学概論等を通して各教科の〝くすり〟に対するかかわりあいを教え、薬の多面性に目を向けられる柔軟さも早期に身につけさせたい。既成の薬学教育体制の中での改革は大変なことではあるが、**学部昇格**を機にカリキュウムの合理的再編成を行い、それぞれの目指すべき薬剤師像にあった特色ある教育コースを設けては如何であろう。たとえば医療の場での新たな薬剤師の活躍を期待するならば、医学的情報を理解しうるに足る基礎科目の強化をはかり医師と対等に討論出来、薬の専門家としてのプロ意識をもった薬剤師を養成するといったコースも考えられるだろう。

次に早期に大学院の設置を希望したい。薬学教育年限延長論をめぐって種々の提言がなされている中で、大学院の存在は様々な理由で重要な意義をもっている。文部省の認可を得るためには、教員の審査設備その他の審査に合格しなければならない等設置には大変な努力を必要とする。しかし大学院を設置することにより後継者の養成、プロフエッショナル・スペシャリストとして必要な知識と高度な技能を身につけた薬剤師の養成が可能となる。そしてすばらしい研究成果からこそよりすばらしい教育が生れるであろうし、その結果が大学の真の評価になるのではないだろうか（近年、国家試験の合格率を学生の能力とか大学の評価と短絡的に結びつけようとする傾向があるのは甚だ残念なことである）。

以上常日頃考えていることを思いつくままに書きならべてみた。

終りに他の単科大学と違う総合大学の特色を生かした、誰しもが桜薬出身であることを誇りをもって他人に語れるような薬学部に育って戴きたい。そして本薬学部が発展するばかりでなく、日本の薬学教育の新しい局面をきり拓いていかれることを期待したい。

（37年卒　東日本学園大学薬学部教授）

「報告」

学部昇格についての現況と展望

（その２）

理工学部学務担当教授　桐沢　誠

引続き薬学部昇格への経過を報告せよとのお言い付けがありましたが、然したる進展もありませんので、今回はご勘弁をとお断りしたのですが、どうしても書けとのご命令ですので、其の後の状況を書いてみます。前回日本大学本部に薬学部設置検討委員会が設置され、本年１月25日に開催された委員会で、薬学部設置の具体案を作成するための小委員会を設けることが決定されたことを御報告いたしましたが、その後入試の時期に入ったため延び延びになって、設置検討小委員会の構成員の決定は６月12日になって了いました。小委員会は加藤理工学部長が委員長、宮島常任理事、小林医学部長が副委員長をされ、他に委員19名で構成され、その内理工学部関係の委員は学部長を含め15名で、薬学科からは、滝戸教授、山内助教授と私の３名が加わっております。この小委員会の理工学部関係者15名で、さらに第２小委員会に相当するものを理工学部内につくり、８月迄に４回の会議を開催して、薬学部昇格実行検討委員会から出す資料を検討して、本部小委員会で検討するための原案づくりを行なっております。なお前回、薬学部昇格実行検討委員会は薬学科教授８名で構成される委員会と書きましたが、御協力いただいていた岡村、山内両助教授に６月から正式に委員に加わっていただき、現在10名の薬学科教職員で構成されております。この実行検討委員会は度々会合を開いて、種々討議の上、理工学部内第２小委員会に資料を提出している次第です。以上がその後の経過でありまして、最初にお断りしましたように、目覚しい進展はございません。併し第２小委員会の検討内容もいよいよ具体的になってまいりましたので、近々本部小委員会が開催されることになりそうです。開設以来30年近い薬学科としては、発足する新学部はせめて世間の私大並みのもの（私立薬系大学の現状は文部省の最低設置基準を大巾に上廻っている。）でありたいと希望する訳ですが、資金の問題がからみますので、この希望が現実に理工学部教授会、本部で承認されることは矢張り難かしいことのようです。現在の入学学生定員180名を入学定員とし、これに対する文部省最低基準に近い校舎面積の規模で発足し、以後自分達の努力で充実を計るより致し方がないというのが現在の状況です。現在、我々薬学部昇格実行検討委員会では、例え我々の希望する規模と異なった規模のものになろうとも出来る丈速やかに学部に昇格することが先決と考えております。

55年度総会未開催についてのお詫び

会長　石田　隆夫

桜薬会々員諸兄姉には、それぞれの分野で存分に活躍されておられる事と、お慶び申し上げる次第であります。

「桜薬会」も理事の方々の努力で徐々にではありますが、その活動は軌道に乗って来ております。「桜薬会々報」は復刊以来早くも２回目が発刊され、薬学科の発展やら学内の様子、そして同窓の活躍等、往時を想い起させ、又才月の早さを知らされる様な記事を届けてくれています。

だがここで会員諸兄姉に、お詫をしなければならない事があります。それは会則に年一回総会を開催する旨をうたってありますが、55年度のそれを招集出来ない事であります。種々の理由はありますが、要は私の責任でありまして、その努力不足に対しては、御寛容を願う以外の何ものもありません。

従って54年度の決算報告、及び55年度の予算計上が総会付議事項でありますが、別記の如く常任理事会で報告されましたので、一応の了承をお願い申し上げます。

詳細については事務局から説明してもらう事とし、疑義ある所は次回の総会で承りますので、了解を願う次第です。

昭和54年度決算及び55年予算につい

事　務　局

55年度総会が54年4月1日に行なわれ、年度予算が可決されましたが、事務局の整備、会報の規格・形式の確立に時間がかかり、会報の原稿依頼が行なわれたのは12月初めになり、復刊1号（通刊4号）が出来たのは55年5月10日になってしまいました。

その結果、54年度収入が校友会補助・雑収入（名簿売上・立山先生寄附）のみで、会費収入は無残にも0円という結果になりました。不慣れとは云え事務局の運営に責任があります。常任理事会では、承認いただいた54年度予算をそのまま55年度にスライドし、55年度を桜薬会再建初年度として、会務を遂行することとし、次回総会でその叱正をいただく所存でいます。昭和56年度総会は5月中旬に開催致します。

昭和54年度　決算

収入ノ部　（円）

	予算	決算	増減△
会費	8,000,000	0	△8,000,000
工科校友会補助	100,000	335,000	235,000
雑収入	100,000	77,487	△22,513
計	8,200,000	412,487	△7,787,513

支出ノ部

	予算	決算	増減△
印刷費	2,240,000	25,010	2,214,990
通信費	1,360,000	21,050	1,338,950
人件費	1,000,000	6,400	993,600
事務費	500,000	43,920	456,080
旅費	800,000	0	800,000
会議費	600,000	28,710	571,290
予備費	1,700,000	30,000	1,670,000
計	8,200,000	155,090	8,044,910
次年度繰越		257,397	

「教室だより」

薬化学教室

薬化学教室のその後の状況を報告します。

まず外山美代子専任講師は本年4月より1年間研究のため、星薬科大学へ内地留学しております。いずれ帰学のうえは、他大学の情況なども参考にしてもらって、当研究室に新風を吹き込んでくれることと思います。

55年度に入ってからの教職員の異動は給費生のみで、昨年入室の穴沢まゆみさんは退職して、千葉県柏市の病院薬局に勤務され、同じく鈴木成人君は静岡県掛川市、小笠病院薬局に勤務されました。代って54年度卒業生の馬場雅之、および同じく尾熊丈実が給費生として勤務しております。

現在の当教室員は下記のとおりです。

教授	里見政吉	
助教授	宮尾利政	
専任講師	外山美代子	（既述）
〃	香取悦	
助手	本橋重康	
給費生	馬場雅之	（既述）
〃	尾熊丈実	（既述）
習志野キャンパス		
教授	長谷川稔	
副手	高畠亨	

当教室の卒研生は昨年（16名）に比し本年はにわかに増加し26名（内男子13名、女子13名）となり、いずれも快男子および美女揃いで大変賑かで、頭脳の方も一応みな秀才型のようであり、みっちり仕込もうと思っております。

当教室の卒業研究のおゝよそをご紹介すると

薬化学卒研親睦旅行（55年）

◦マンニヒ反応
◦Bーラクタム環化合物の合成。（以上里見担当）
◦ベンゾフラザンおよびベンゾフロキサンについての反応性。（長谷川担当）
◦DMTFを用いるビルス・マイヤー試薬の反応。（宮尾担当）
◦活性代謝中間体としての核酸を構成する物質とスーパーオキシドとの反応性。（香取担当）
等であり、それぞれについて、学生の希望に従い、実験および文献調査を指導しています。

最後にかっての当教室在室者の方々の現況をお知らせします。（昭和51年以前の卒業生については昭和51年発行の「桜薬会々員名簿」に収載されておるので以後の方々のみを表示する）　（里見　記）

氏　名	卒年	現　況
岡田　知幸	52年	出雲市国鉄病院勤務
松本　高彦	同	サカエ薬局（Tel 044-555-5251）勤務
小林　文江	同	石山病院（Tel 03-370-2381）勤務、自宅品川区小山2-9-26
酒井原謙吾	同	山形県阿寒江市本町 2-1-18
永野　陽子（旧姓坂田）	53年	埼玉県浦和市南元宿 173（Tel 0484-41-2761 ）
土橋　和正	同	山梨県南都留郡勝山村 933（Tel 05558-3-2245 ）
副島　昭二	同	福岡市西区田原 4-24-13（Tel 092-863-3336 ）
白井　良和	同	和歌山市堀止西 2-9-27（Tel 0734-23-1168 ）
穴沢まゆみ	54年	既述　自宅、千葉県柏市ひばりケ丘16-3（0471-64-5044 ）
鈴木　成人	同	既述　静岡県掛川市　小笠病院　（Tel 05372-2-2288 ）

生化学教室

教室員一同、有吉先生を中心に新学期を迎え、元気で張切っております。教員室の移動は大塚一記氏（日大生化54年卒）が退職され後任として福島信子氏（日大香粧品55年卒）に副手（給費生）を勤めていたゞいております。小川真理子助手は東京大学工学部に「ESR 法による放射線化学反応初期過程に関する研究」の論文を提出して、その審査に合格され、5月13日付で工学博士の学位をめでたく取得し、御本人、教室員ともどもほっとしています。この次は小池助手の番になるように頑張っていただいております。

今年4月の日本薬学大会（東大駒場）では、好熱菌の研究「湿泉源中の好熱菌よりαおよびβ－galactosidase の誘導」を昨年の日本大学講演会に引続き発表致しました。好熱菌は生物としては単純でかつ熱および化学的に非常に安定であるため、不安定で微妙な生体物質および反応を究明する生化学の研究テーマとしてまことに適当なものと考えております。

次回の熊本で開催される薬学大会にむけ、「タカアザミの根の糖質」、「昆虫のトレハラーゼ」、「地黄の成分および薬理作用」、「生体関連物質のLET効果」などの研究が続行され、このうちの何件かを発表し、出席する予定です。その時には御出席の皆様とお会い出来ることを楽しみにしております。

昨年度の卒研生16人は全員卒業、そのうち薬剤師国家試験に14人合格しました。それぞれ格方面に進み活躍しております。

梅沢　芳夫	埼玉県地方公務員	埼　玉
尾崎登志夫	藤沢ストアー	東　京
馬庭　弘毅	藤沢ストアー	東　京
佐藤　成美	三祐産業（稲垣薬局）	東　京
戸叶　素美	三祐産業（稲垣薬局）	東　京
鮫島　達法	阪大病院研修生	大　阪
芹川　泰造	千葉県立佐倉病院	千　葉
高山　義教	長野県地方公務員	長　野
中山　修一	内田和漢薬	東　京
藤本　康嗣	島田病院	東　京
甫立由紀子	慈恵医大分院	東　京
牧野　俊猛	阪大大学院	大　阪
三木　玲子	三井記念病院	東　京
目鳥　幸一	北品川総合病院研究所	東　京
和田　勝彦	森久保薬店	神奈川
杉山　　順	大内病院	神奈川

今年の研究生は13人で夏休前に研究テーマも決り、7月28日～30日まで、2泊3日の研修旅行のため軽井沢に行ってまいりました。そして9月から本格的な卒業研究を開始することになっております。

最後にすでにご存知の方もおられると思いますが栄養学講義の時に話す〝健康な生活を送るための10ケ条〟を御参考までに述べさせていただき、健康な生活を送るための10ケ条（癌、高血圧、その他成人病にかからず健康で長寿を全うする方法）

1.心身の老化を防ぐため、心と体の運動をすること
2.疲れ、ストレスなどを翌日に持越さないこと
3.バランスのとれた栄養をとること
4.食事は腹八分目にすること
5.酒、タバコ、コーヒーをほどほどに
6.塩辛いもの、熱いもの、こげたものはたべない
7.せんい質のものをとること
8.ビタミンA(有色野菜)ビタミンC(生野菜、かんきつ類)ビタミンE(胚芽米など)をよくとること
9.強い直射日光にあたらない
10.身体を清潔にすること

皆様の増々の御健康と御発展にお役にたつことをお祈りして教室だよりを終らせていただきます。

追記　有吉歌子先生は55年9月に転居されました。

〒270-14 千葉県印旛郡白井町堀込1丁目6番
8-302　　電話　0474-91-9589
（高橋記）

放射化学教室

その後会員諸兄姉には各方面で御活躍のことと思います。本会誌4号発行から半年経ちますが、昨年9月から今年8月まで当教室が閉鎖されており（院生扱い給費生としては昭和48年4月から昭和51年11月まで久保山昇氏ー現、松戸歯、薬理ー、その後昭和54年3月まで、山口やよいさんが勤務しておりましたが、正規の教員は私以外おりません)、私も今年8月中旬帰国したばかりで、この1年間教室での活動が止まっていましたので、ここでは今年度の卒研のこと、アメリカ留学を終って気のついたことなど書いてみようと思います。

学校の方は9月から後期が始まり、卒研生も希望をもって各教室に配属になり、当教室にも男女3人づつの6人が入室しました。実質約3ケ月しか実習期間がなく、研究にしても何ができるのか考えてしまいます。そこで研究を進めるよりも進める過程を重視して、将来の人生生活に大切な、判断力、忍耐力を養えるように努力してみようと思っています。その成果については次号にでも掲載しようと思っています。

さて紙面を少しいただき1年間のアメリカ生活を振り返ってのべてみようと思います。昭和54年9月から昭和55年7月までシカゴ大学医学部（写真は入口）に籍をおき、研究の進め方、アメリカ人の生活様式等を勉強し、実地に観察しました。

生活様式については職業を自由に変えることができることができるのが1つ目につきます。日本でも最近脱サラなどと言われて、以前に比べるとより自分に合った職に変わる人もいますが、まだ一部の人にすぎないようです。各自がさらに自分に合った職場に移れるように仕事を一生懸命やっており、そのためにはかなり利己的になっているようにみえました。大学でも大学院生は先生にわからないことを聞けば必ず何らかの糸口、解答を与えてくれると思っており、教授も何らかの指針を示せる状態に自分をいつも保っておく必要があり、またそれに見合うものをもらっているので当然という考えが双方にあるようです。ですから学生は先生を自分の学問の知識を高めるための道具と思っているようです。日本のように先生をうやまう風習はないようです。仕事を能率よく進めて、自分の時間を作り、それを大切に

して貪欲に体力の維持、増強に、教養を高めるのに役立てています。このことは私も見習う必要があると思いました。しかしこのように自己中心的な考え方が悪く表われていることもあるように思います。例えばアメリカ国内(世界各地)で多くの日本製品が流通し、大変な人気を得ています。自動車、電気製品、カメラ、時計そしておもちゃ等遠く離れた日本のものがなぜ流通するのか考えてみますと、日本人が先天的に手先が器用でそのために良い品物が作れるということもあるでしょうが、日本人が組織の中に入り、自分の意志を押えて協力して努力する勤勉さにあるように思うのです。こんな話を耳にしました。「もし日本の車が故障して修理工場に持って行くと仕事時間がすぎても完了するまでやってくれるがアメリカの車は修理できなくても時間がくればやめて翌日にまわしてしまうのでafter careの面でも日本がすぐれているといっているそうです。今では日本的勤勉さが評価され恐れられてもいるようです。勤勉さを失わずに一層要領よくして自分の時間を作らなければと思っています。

最後に仕事について少し触れておきますと、前号にも書きましたが、ChAc(コリントランスアセチラーゼ)酵素の精製(出発原料の約15,000倍に活性上昇)し、その酵素を用いてモルモット、ラットに抗体を作ることに成功しました。この結果についてはいずれ雑誌に掲載されることになっています。

では諸兄姉の一層の御活躍をお祈りします。

(青木記)

衛生化学教室

当教室に卒論生の配属がきまったのは、6月に入ってからと思うが、今年は卒論生の配分方法が変り、その方法を簡単に述べると、まず掲示板に各教室の受入れ人数を明示した紙をはりつけ、そこえ学生自身に名前を書きこませる、そして期間内は書換え自由という方法でした。その結果、当教室には30名(男子13名、女子17名、女子に相変らず人気がある？)が配属された。前期試験が終ると早速2泊3日の卒論旅行、場所は伊豆大川にある日大法学部のセミナーハウス、何しろ、午前中はびっちりと(学生の発表やら先生のお話)セミナーを行い、午後は昼食も早々にがっちりと今井浜で海水浴やら西瓜割りで楽しみ、夜は伊豆の新鮮な魚(?)で酒盃をかたむけての例によっての学生さんにとって大好なコンパ(酒道をとく？)と私にとってはかなり強行スケジュールでした。この様に今年の卒論生は30名という大所帯で始まりました。研究テーマも従来のものと本筋で大きく変ることはありませんが、今年のテーマを記しますと

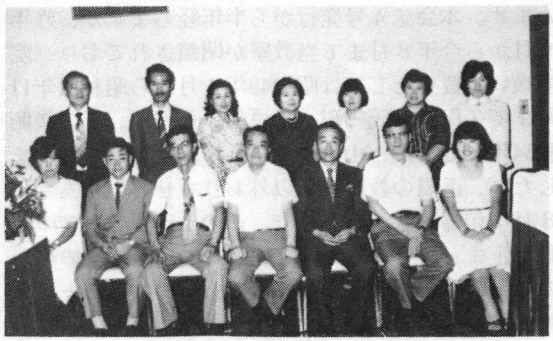
① 塩素の生体および生体成分に対する影響に関する研究

② ヒト赤血球の細胞膜中の糖タンパク質から特に血液型活性をもつ成分の免疫化学的性質の研究

以上のことについて今年から新たに変異原性試験というテクニックを駆使し、毒性・薬物代謝という面からも研究を進めることになりました。また、機器類も徐々に充実されていますが、特にガスクロマトグラフィーについては、各種の検出器(FID. ECD. TCD. NPD)と、一般に使用されているキリヤーガスの窒素のかわりに水蒸気を使用するスチームガスクロマトグラフィー等を備え、現在、全機種とも常時運転で多忙さを極めております。

一方、当教室の同窓会である〝カッパ会〟(写真)も毎年行われておりますが、今年も9月7日に湯島会館(幹事22回大室さん)に70余名が、遠くは山口県や新潟から馳せ参じた方、20余年ぶりに出席された方等々、なごやかに初秋の一日を過されました。

終りになりましたが下記の方の御住所を御存知の方は当教室までお知らせ下さい。



1回(裁)村上恭子　4回(裁)船橋和子　11回(裁)富田暁子
尾崎千恵子　5回(裁)飯島房子　12回　山崎忠男
加来純子　6回　鈴木桂子　山崎輝子
佐藤千束　西井幸子　13回　千葉明子
原田二郎　永田欣正　陳　雪芬
南　俊子　7回　足立興成　14回　河野武博
3回(生)篠崎睦子　山本如子　中田耕二
(裁)大川和子　堀　光雄　15回　菅森幸子
服部美佐子　8回　阿波克明　佐中規子
4回(生)饒波和子　9回　原　良介　20回(衛)海野玖二子
水口ミサオ　10回(生)筒井力彦

(生)：生化学教室、(裁)：裁判化学教室、(衛)：衛生化学教室　（長谷川　記）

薬品製造学教室

桜薬会々員の諸兄姉には御元気で各方面に御活躍のこととお慶び申しあげます。前報にもありましたように薬品製造学教室は教室員の顔ぶれも一新しまして、一同新たな気持で教室の運営に邁進しております。教室員としては桐澤、徳竹、道祖土、三宅の四名に加えて本年四月からは給費生扱いの雇として井上操子君に残っていただき、学生の指導に研究テーマの予備実験にと頑張ってもらっています。

卒業研究生は昨年は29名、本年は30名を数え、後期からの実験に備えて目下腕ならし中といったところです。研究テーマは、生理活性物質の合成としてβ－ラクタム化合物の合成、ラニチジン関連化合物の合成を、またニトロベンゼンのO－、P－位への求核置換反応を検討する予定です。β－ラクタム化合物というのはペニシリンやセファロスポリンなどで御承知の通り四員環のラクタムで、立体特異的に反応が進んでくれれば面白いところです。他にプラスチックの可塑剤であるフタール酸エステル類の熱分解における挙動についても検討中です。まだ教室が新発足してから日を浅く、すべてはこれからといったところです。

最近研究室に整備された機械類には、赤外分光々度計、ガスクロマトグラフ、各種天秤などがあり、これらは毎日活躍しています。合成化学というのはあまり機械類は必要としないのですが、それでも研究上最少限の機器類は是非設備したいので、逐次揃えて行きたいと思っております。

最後に卒業生の就職状況はというと、概して良好で病院の薬局、企業の現場、営業、薬局など、それぞれその所を得て就職しております。幸い薬学系の卒業生の場合は大ていはどこかに就職できるようです。これも先輩諸兄姉が種を蒔いておいて下さった賜と感謝しております。終りに卒業生各位の益々の御発展を祈念し、今後共薬学科への絶大なご支援をお願い申しあげます。　（徳竹　記）

生薬学教室

生薬学教室出身者も、今年の3月には504名になりました。そして、そのOB会である「りんどう会」は、毎年2月第1日曜日に新宿後楽園ビル「アドホックセブン」で行なわれていますが、今年も2月3日に木村雄四郎先生、滝戸道夫先生をはじめ150余名もの会員が集まり、非常に盛会で心強い感じでした。木村先生は、皆様御存知の通り北里研究所附属東洋医学研究所部長として御活躍中で、5月には薬業視察のため中国へ行かれるとか、若い秘訣は奥様の食事と朝の散歩であるとお話があり、滝戸先生からは、卒業、入学等学内事情、教室の仕事等の近況報告がありました。又招待された卒論生達（むろん無料です）も先輩から社会の話等を聞けて有意義な時間を持てたとよろこんでいました。

昨年は、日本大学学術研究助成を一般研究で山内先生が「キク科植物の果実成分の研究」のテーマで

受けられました。今年は、総合研究で滝戸先生が、医学部、歯学部、松戸歯学部、農獣医学部との合同で「腸管吸収の機能と形態に関する総合研究」のテーマで、小林茂三郎副総長を代表者とし総額1027万円もの助成を受けています。

教室員の古阪直子さん（24期）は、松戸歯学部小児歯科教室助手として移られ小さな身体で大きな電子顕微鏡ととりくんでいます。後任には3月卒業した梯(かけはし)弘子さん(25期)が加わり慣れない腸管吸収の実験に苦労しています。又副手の金児朋子さん(21期)は、4月1日付で助手に昇格しました。

現在教室の主な研究テーマは、

1）水製エキス中の成分研究
2）Cassia属植物の成分の研究
3）酵素阻害物質の検索
4）薬物の腸管吸収に関する研究
5）抗炎症、抗菌性物質の検索
6）生薬の規格設定に関する研究

等を主体として研究に従事しています。

その成果の一部として薬学会100年々会東京にて、「広金銭草の成分」、「銀柴胡の成分」、「決明子の成分研究　2」、「Cassia属植物の瀉下効果について　2」の4演題を発表しました。又、生薬学会第27回年会名古屋において、「オトコヨウゾメの成分研究」を発表予定です。他に、薬学雑誌に投稿中ですし、外国誌にも2報以上報告の予定です。

3月には卒論生全員が卒業し、4月の国家試験は受験した全員が合格し、ホッとした間もなく6月には新卒論生が配属されました。31名（男子11名、女子20名）と大世帯で大変にぎやかです。7月には例年通り伊吹山に卒論旅行へ行きました。今年は初めて伊吹山北尾根に登り採集しましたが、尾根道のため歩きやすく両側は見事なお花畑でした。毎年5合目には植物を植えていますが、ウイキョウが花を咲かせ、ハッカやボウフウ等も雑草に負けじと頑張っていました。

薬用植物園は、津田沼校舎より移転して15年をむかえました。3年前には待望の温室も設置されバナナも初めて実をつける様になりました。隔年に作っている植物目録1980年版には、これまでの成果として149科898種を報告しました。園内は芝生の歩道が緑のジュウタンの様で、漢方薬、医薬品原料、民間薬、有毒、香料染料、水生、熱帯等植物郡に分けられ、滝戸先生がアメリカ留学時に持ち帰えられた植物の区角もあります。外周には木本植物を集めその下には日陰げを好む植物が植えられています。現在、社団法人日本植物園協会の理事園でもありセンナや金銭草等日本で初めて花を咲かせた植物も数種あります。遠藤主任が薬草園の整備にあたられ、園内の隅々まで目をくばっておられます。桜薬会の諸兄姉には是非一度この美しい薬草園を訪れますようお待ちしております。　（安川記）

薬品分析化学教室

涼しく短い夏も終り、桜薬会会員の方々には御元

気で御活躍のことと思います。

当教室員一同〝晴耕雨読〟という気持ではりきっております。3月には28名の卒業研究生全員が卒業し、諸先輩方に見習って活躍をはじめております。

教室出身の桜薬会々員も約430名となり、6月15日には第5回の同窓会も開催され、学生時代の思いで、近況等、時の経つのも忘れ楽しい一時をすごしました(写真：池袋にて)。後期になり本年度の卒業研究生の所属も決定し、24名となりました。

教室員の移動については、院生扱い雇として勤務されていた加藤孝君が3月に退職、4月より薬品製造学教室出身の安孫子正敏君が務めております。昨年度1年間、富山医科薬科大学に内地留学の内倉助手は4月より復帰し、桃澤教授は1年間の予定で8月にアメリカのN.I.H.に海外留学されました。

留学先　Department of Health, Education, and Welfare Public Health Service National Institutes of Health, Bldg, 10 Rm 7N-319. Bethesda, Maryland 20014 U.S.A.

滞在先　14114 Arctic Avenue, Rockville, Maryland 20853 (TEL 301-460-4294)

現在の教室員は桃澤教授、山本助教授、内倉助手、百瀬、石井両副手、院生扱い雇の安孫子正敏君の6名であり、また元素分析は小林茂子嬢が担当され、学内、学外の試料の分析を行っております。

教室の主な研究課題は無機物質、植物成分等の分離、精製に応用されている、桃澤教授の開発された〝向流クロマトグラフィー〟をさらに多方面への応用について検討を加えています。また山本助教授は従来より、医薬品の安定性に関して、熱分析法を適用し研究を進めています。さらに昨年度留学した内倉助手は生体成分の分析、特に微量に存在する、血中のカテコールアミンの分析に関して高速液体クロマトグラフィーを適用し、種々の方法により検討しています。百瀬、石井両副手は、向流クロマトグラフィーについて研究しています。当教室も多方面より検討を加え、教育、研究に従事しています。

未筆ながら会員の皆様の一層の御活躍をお祈り申し上げます。　(内倉　記)

薬剤学教室

薬剤学教室の近況報告は後藤さんが再開された桜薬会会報4号で具さに紹介されたので私は日大薬学科創立時代の回想録でも書くことにした。私の愚談として御容赦を乞う次第である。歳月の過ぎるのは実に早い。来年で日大薬学科も創設30年。人生で言うと青年期から壮年期に達した時期と言えよう。昭和26年、薬学の各界の方々の折衝の上、日大工学部に薬学科の創設が決まると、横地工学部長、斉藤学監を中心に創設後に出講し日大薬学科創立に尽力される先生方と懇談し創立準備に関しての意見を伺う薬学科創立準備委員会というべき会合が当時数回開催されたのである。私も開講後には不破先生と共に現代の薬剤学の一部を教鞭を執ることになっていたのでその都度会議に招講を受けた。会議懇談終了後には縁起を担いだわけではないだろうが毎回必ず「カツ」ライスを夕食に御相伴になったものである。またその時期に1号館の玄関上の2階の一室に薬学科設立準備室の名札が入口に掲げられた。この室こそ今日の日大薬学科発祥の場と云える。此処には当時初代薬学科主任教授松尾先生、専任教員に内定していた石田先生、平山先生更に創設に尽力された石松先生また薬学科初代の助手さんともいうべき小林君(十二指腸潰瘍で手術経過空しく他界)等が日頃詰めて開設に必要とする研究、実習の器具機械類、薬学専門書の準備、今後増設する研究室、学生実習室の構想と設立準備のため協議する唯一の場所であり控室であったのである。この準備室で小林君が薬学科開設に備えて試薬瓶に黙黙と1人で薬品のラベルを貼っていた姿が今でも目に浮んでくる。26年12月中旬、石松先生(本年4月定年で薬学科御勇退)から予て工学部から文部省に申請中の薬学科、工業経営学科増設認可の件で文部省から大学設置審議会委員、薬学視学委員その他文部省の担当官が明日の午後視察のため来校されるので出校して協力して呉れるようにと依頼があった。当時現在の5号館の処に日進講堂と称した木造2階建の4教室の校舎があった。

この校舎は認可後薬学科の講堂や生薬、薬物学の研究実験室にする予定なので視察される先生方が行かれるから御出迎し、御案内するため入口で待機していて呉れと云われた。その日は木枯の吹く寒い日であった。日進講堂の入口で黒いオーバーを着、口には葉巻を銜えステッキを片手に持った石田先生（心不全で他界）、温和なクリスチャンの平山先生(他界)等と入口で視察員等をお待ちしたことがつい最近であったような印象に残っている。私の記憶では確か当時学習院大学学長(前第一高等学校校長)でかの有名な安倍能成先生を筆頭に多数の大学設置審議会委員や薬学専門委員では文部省薬学視学委員、東大薬学科教授石館先生(現日本薬剤師会会長)、その他文部省担当官等が当日多数来校し視察された。単に学科増設認可に当っても工学部ばかりの視察だけでなく、全日大の他の学部の施設を総て視察されているので大変であった。バスを仕立てて全学を視察されたが仲々の時間を要した。石館教授、文部省担当官等が日進講堂、工業化学２号館を視察されたのはもう夕暮れ４時頃だったと思う。石館教授、文部省担当官、工学部の御偉方の先生の中に交えて石松先生が御説明役となり石館教授と肩を並べて歩き、工業化学２号館(当時地上２階建)の一階の天秤室をお見せして、「先生、学生実習の天秤室です。良く揃っているでせう」また一階の実習室を御案内して「此処で分析学実習を教える予定です。既に手際よく薬学専門図書も並べてあった工業化学の図書室では「此処は図書閲覧室です」と得々と御説明申し上げていた。当時庶務課の伊賀山氏(前理工学部事務局長)などはこの薬学専門図書を揃えるのに非常に苦労された御１人である。文部省の視察も無事終了。厚生省から帰路来校された中村先生等を交えて鰻と冷酒で薬学創設の許可を期待して祝盃し、１号館の玄関を出た時は日没後の寒い夜であった。翌年１月には大学設置審議会から薬学科認可が答申され、４月選抜された160 名が第1期生として入学、以来本年３月卒業の第25期生迄実に5000有余の人材が30年の歴史の中に育成された。その人々は医療社会・公衆衛生・学者あるいは実業界に夫々の分野で卓越した才能を発揮して社会的に高い評価を受けている。私達が薬学を学んだ時代は大学１校(現東大)、薬専15校(内女子校６校)で年間卒業生1800名内外、現在は薬科大学42校、薬剤師国試受験する者9000人弱。今年も新設校２校が申請。その中に薬効科、社会薬学科というユニークな学科を申請している大学もある。本学も加藤理工学部長の深い御理解と御支援で斬新な薬学部を目差して昇格への道を歩んでいる。　　（猪瀬記）

薬物学教室

薬物学教室員一同変わりなく日夜教育・研究に及ばずながら努力いたしております。

現教室員は村越善衛教授をはじめ、草間貞・江口国子両助手・牧村瑞恵の４名と、院生扱い給費生岡安千博君の他動物室所属高橋光枝さんで皆張切って研究にまた学生の指導に当っております。昨年の院生扱い給費生の田中俊一君(24期)は家庭の事情で郷里宮崎へ、また研究生の木村陸子さん(６期・化研生薬勤務)、田村孝夫君(11期経営学教室卒・日本ロッシュ勤務)はそれぞれの会社へ帰り、弘中賢二君(24期)は阪大大学院へ巣立ってまいりました。皆張切って研究に、お仕事に精進されている様子です。

当教室関連科目・生理学解剖学担当の渡辺俊男先生は本年３月で横浜国立大学を御退官なされ、４月１日より非常勤ですが研究所教授になられ今まで通り講義・実習に当られることになりました。また病理学担当の花岡清助先生（医学部病理学教室講師・明治薬科大学客員教授）も研究所教授になられる御予定と承っております。

薬物同窓生の動向としては、多方面で活発に御活躍なさっていることはもとより、留学あるいは出張等で海外へおいでになられた方、あるいはなられている方が大勢いらっしゃるかとは存じますが、教室で存じ上げている方々では本学放射化学担当の青木正忠氏(８期)と大屋敷孝雄氏（10期・北陸薬科大学勤務)がそれぞれシカゴ大学、ニュージャージ州立ダトガーズ医科大学より８月帰朝され、越川富比古氏(18期・阪大大学院博士課程卒）がミシガン大学に留学中、斉藤重野さん(10期・本学松戸歯学部勤務)が10月にアラバマ大学へ留学される御予定です。

当教室３月卒業生の就職状況は公務員１名、企業の営業６名、研究・開発６名、病院４名、大学関係２名と幅広い分野で活躍しています。

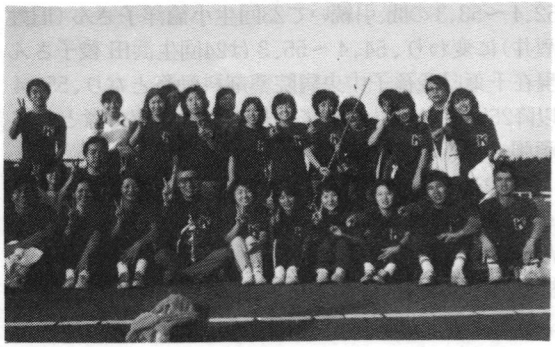
また長年に渡り就職の指導に当られておられました猪瀬秀雄先生(薬剤学教室助教授)が今年度御停年ですので村越善衛教授が理工学部の薬学科就職指導委員となられました。薬業界の方々との交流を深めるとともに関連書物を読まれ、可能性の沢山残された若者の、そしてその人の一生を左右するかもしれない就職に対し、期待と祈りをこめて学生の指導に精進なされております。

研究課題は前会報(4)で報告させていただきましたのと同様で、４月に日本薬学会第100年会、６月には日本薬理学会第62回関東部会でそれぞれ「輸精管のアセチルコリン収縮に対するモルヒネの影響」、「Opiate receptorについて」を発表しました。また11月15日(土)開催予定の日本大学理工学部学術講演会には「Cepharanthineのラットと家免における代謝産物について」と「海馬誘発電位に対するモルヒネの影響」を報告致します。

今年度の卒研生は男子13名、女子15名の計28名です。それぞれの課題で良き研究をし３月には立派に各々の道に巣立つことが出きるよう、教室員ともども頑張っております。　　(牧村記)

香粧品化学教室

教室員一同、変りなく教育と研究に勤しんでおります。前会報において佐藤孝俊先生が教室の今昔について詳細に記されましたので、その後の教室の動向についてお話いたします。



薬学科のために創設以来、御尽力くださいました石松新太郎先生が55年４月をもちまして定年退職されました。教室員一同、先生に感謝するとともに責任の重さを感じております。また、先生にはますます御健勝にて御活躍くださいますよう期待しております。

佐藤孝俊先生は有機化学工業訪中団の一員として55年４月11日から10日間の日程で、上海の香粧品会社、製薬会社、天津のゴム会社、染料会社、北京の合成繊維会社、顔料会社など、中国の化学工業の現状について視察され見聞を広めてまいりました。この大いなる成果は今後の教育、研究に役立てていただけることと思います。毎年開催されております薫会(香粧品教室出身者の会)において、会員の皆様には次回の席でお話していただけるものと思います。

最近の教室の研究は、「エマルションなどに添加した基質の自動酸化におよぼすミセルの影響」について行っています。その方法として基質のミセル内位置、界面膜形成と酸素吸収量の相関、ミセル系での効果的な抗酸化剤の撰択方法などを検討しております。これらの成果については油化学、薬剤学、日本香粧品科学会誌などに掲載されております。

今年度の卒業生（25期生）は昨年習志野校舎で行われました卒研対抗ソフトボール大会においてブロック優勝を果しました。全員Kのイニシャル入りの赤いTシャツと白のウインドブレーカーを着用し、衣裳負けせずに優勝トロフィーを勝ち取りました。その時の勝利の笑顔を掲載します。また、今年度の当教室の薬剤師国家試験も95%とすぐれた合格率であり、すべての面で一丸となって躍進しております。現在、その卒業生も社会人一年生としてＩＦＦ（インターナショナルフレグランスフレーバー）、大正製薬、持田製薬、和光純薬などの研究室やその他、病院薬剤師として活躍しております。

今年度の卒論生は17名（男子４名、女子13名）が配属となり、７月21日より１泊２日で山梨県河口湖に研修旅行をしました。過去４～５年来、当教室の研修旅行は交通手段にマイクロバスを使用しております。バスが出発するやいなや懇親会が始まり、この点については昔と少しも変らないと思っておりま

す。今年は男性が少ないにもかかわらず、相変らずの快男子がおり楽しい雰囲気が予想されます。

現在の教室員は佐藤孝俊助教授、斎藤好廣助手(48年卒)、中堀克美給費生扱い副手(54年卒)の3名です。

日進月歩の科学技術の発展につれて香粧品教室も常に向上することを目標に、今後は佐藤先生を始めとして教室員一致して研究を続けることになりました。皆様の御健康と益々の御発展を心よりお祈り申し上げ、薫会には是非お揃いで出席下さるようお待ち致しております。　　(斎藤　記)

経営学教室

復刊なった桜薬会会報第4号の配布を受けたのがきのうのように思えるとき、再び編集委員氏から「続教室だより」の執筆方の依頼を受けたこともあって、1カ月以上も戸棚に放置し、提出期限の切迫を思い出しあわててペンを走らせた次第です。前号においては、経営学教室の研究内容があまり知られていない憾みがあるため、医薬品産業の発展と本教室の軌跡を述べたところでありますが、教室員の動静に触れることなく終ってしまったので、今回はそこから教室だよりを進めることとします。

昭和31年4月以降理工学部が大学紛争に捲き込まれた昭和43年6月までの間は、薬学科父兄後援会事務職員の木村隆治氏が唯一の協力者でした。偶々筆者が同後援会の会計事務を総括するよう指名されたこともあって、日常の仕事のうえでも緊密な連絡をとり合う間柄から同氏に所属学生諸君の指導を分担してもらうようになったことは大変幸いな出来事であったと思っています。同氏は、父兄後援会が機能停止後の44年1月本部広報部広報課に転属され、現在は総合企画室主任として活躍されております。

次いで、授業再開後47年3月までの間は文字どおり唯一人孤軍奮闘の一時期でありました。とりわけ、大学紛争を一転機として経営学教室の卒業研究着手を希望する学生諸君が著しく増加し、いっそう苦労を強いられるようになったことが挙げられます。学生の実習を担当せず、かつ、研究内容が実験を伴わない教室には副手の配属を認めないという薬学科独自の掟に従い、自らの研究はもとより、学生の研究方法、論文原稿の添削などのほか、これに加えて当時(昭和35.4～昭和40.3)は非常勤講師の先生方の専門領域への卒業研究を認めていた関係もあって、これらの学生に対する連絡調整役を引受けざる得なかった時代でもあった訳です。このような関係から、いわゆる外来の先生方の卒研につかれた多くの卒業生諸君と今日なおご交誼願っていることも故なしとしないところといえるでしょう。

薬学科以外の各科は大学院学生を助手として採用することが従前から認められているのに薬学科のみ大学院薬学研究科がないために、この種人員の採用がないのは不合理であると当時の教室主任黒柳先生(現日本大学名誉教授)の特段の尽力によりその採用が認められるようになり、昭和47年4月から各教室1名宛配置に増加されたので経営学教室にもはじめてその年卒業の岡本たか子さん(旧姓倉田)が教室第1号の院生扱副手となり、部屋全体が華やいだ雰囲気に変化したものです。48、4から18回生 土橋敬子さん(旧姓佐藤)と交代、学生時代に硬式庭球部で活躍した頗る豁達なお嬢さんで49、4からは就職担当へと転属したが結婚のため中途退職、49、4～50、3の間は19回生鈴木敏夫君でその後国立衛生試験所を経て現在成田空港検疫官として活躍中、50、4～50、7小沢悦子さん(旧性竹内)で勤務期間は短時日でしたが、病院薬局の実務を体験したいとの希望で退職、同年9月より50、4卒業の佐藤澄子さん(旧姓佐々木)を後任に口説き、爾来52、3同期卒業の佐藤章君と結婚まで1年6カ月勤務してくれました。次いで、22回卒業の倉田せつ子さん(第17回生岡本たか子さんの妹)が52、4～53、3の間、引続いて23回生小籠洋子さん(旧姓酒井)に変わり、54、4～55、3は24回生浜田 俊子さん現在千葉県我孫子中央病院薬剤科勤務となり、55、4以降25回生の藤井靖子に交代し、よき協力者として頑張ってくれています。

以上のとおり、年度ごとに副手さんは目まぐるしく交代していますが、教室のためお手伝いいただいた皆さんに感謝するとともに永い人生に幸多かれと祈る次第です。

経営学教室同窓会については、昭和53年第14期卒

業生、つまり大学紛争下に卒業した諸君達の企画と積極的な活動と先輩各位の賛同助言とが相俟って「いずみ会」として創設され、その第1回総会が同年10月湯島会館に170名有余の同志の参加を得て盛大に催されたことはご同慶のいたりです。規約によれば毎年1回総会開催を定めておるものの、毎年では無理になるおそれも考えられるため2年ごとに改めたいとの意見を踏まえて、今年秋季は総会を開きたいとのことで、旧交を温め、自慢話を伺うのも亦楽しみです。また、経営学教室は本年度卒研生受入れから希望者に対し入室試験を採用し、研究指導の充実を図るため適正人員に制限することとしました。この結果、10数名の学生さんは他の教室へ志望替えをしてもらいましたが、この措置に対する是非については総合的に見極めたいと考えています。（中村　記）

「駿河台コミニュティー」

卒業20周年　五期生

6月15日、5期生同窓会が新宿三井ビルで開かれました。(写真) 快晴に恵まれ、先生方はじめ遠路はるばる飛行機で出席された方々、本当に懐かしい一時を過すことができました。ずい分感じの変られた方、また全然変っていらっしゃらない方、それぞれ社会で中堅として活躍されているようです。また子供達もそろそろ大学受験の年令になっている様です。「十年一昔と云う言葉が有りますが卒業して、二昔！歳月の流れの早さにおどろきますが、ずい分この二十年間にはいろいろなことが有りました。

先生方も皆様お元気に御活躍の御様子、本当にうれしく思います。考えてみれば私達も、もう中年？先生方のあの当時の年令にきているのですが先生方の方がやはり貫禄があったように思もわれますが。特に中村先生、山本先生のお変りになっていらっしゃらないこと、滝戸先生、長谷川先生の貫禄のおつきになったこと、桐沢先生はあの当時の木村先生に似ていらっしゃる様な気がします。石松先生は良いお年のとり方でイメージが全然変られすばらしい！佐藤先生は髪の白さはめだったけれどやはりお変りになっていらっしゃらない。沢村先生はカッパ会で度々お目にかかっているので何と書いて良いやらどうしてもペンが走りませんがずい分年をとられた感じがいたします。こうして写真を見ていると理工学部の教室で授業を受けていた時のこと、白衣を着て山の上の薬学科の教室で実験をしていた時のこと、友達との会話、頭の中で次々と昨日のことの様に思い浮びます。世間は広い様で狭く、御主人同志が医学

の世界で同窓だったり、どこかでつながりが有ったり私も主人の職場で日大の後輩の方があの卒論だったり、同級の方とスキーが一緒で写真に写っていたり医薬の世界はどこか通じている様に思われます。

皆様御元気に又三昔前を懐かしむことの出来ますように、日大薬学科の発展を心より祈って。(R・Y)

「伝言板」

石松先生出版記念会

前号で御知らせしました、大学予科同窓会、高等工学校治金科同窓会との合同で開催する予定の「石松先生をかこむ会(感謝する会)」が変更になりました。先生より明年一月に著書を出版するので、その際開かれる出版記念会に「かこむ会」も合流してほしいとの強い御希望がありましたので常任理事会で検討したところ先生の御意志に従い他同窓会と足並みをそろえるとの意志確認が行なわれ、承認致しました。後日案内を送付致しますので、多数の御出席を御願いします。　(事務局)

薬学科就職委員会より

就職は学生の一生を支配する重要な事項であり個人の適性、資質に適合した指導が要求されますので、今年度より4年担任を含め、各研究室より選出された委員により運営されることになりました。

私共の薬学に限ったことではないようですが、大部分の学生は漠然とした意識と偏差値で入学し、確固とした使命感もなく、おゝらかな気持で、卒業は何とかなるような認識で学生生活を過ごして、4年の後期位になって漸く就職のことを考えると云っても過言ではないように感ぜられます。その上最近の薬業界の好景気も手伝って卒業出来さえすれば就職は何とかなると云った幸過ぎる不幸があるようにみうけられます。さらに薬学を修めた人間に対する社会の要求は質的にも大きな変貌を示していることは今年の薬事法の改正にも窺うことが出来ますように特に薬に対する情報活動の必要性の増大は、この売手市場の傾向を一層高めていることもこの様な風潮の原因になっているようです。卒業後自分達の活動分野に対する認識の薄いことが、平素の勉学意欲にも、職業の選択にも反映しているようにも思われます。

そこで、第1線で活躍されている各方面の卒業生の方々7名をお招きして9月26日1時より5時まで講演会を開催しました。各分野における生々しい実状、将来の展望をお話下され、また先輩として後輩に温い、そしてまた率直な、厳しい要望を示され、学生の熱心な質疑もあり、多大の感銘をうけ、大変有意義な成果を収めた模様です。終了後も長時間講師の方々と4年担任との懇談、率直な意見の交換、卒業生としての、我々教師に対する御意見、御要望をも頂き、感謝しております。今後もこの様な機会を持たせて頂き度いと存じますので皆様の一層の御協力、御支援賜りますようお願い申し上げます。実社会で御活躍されておいでの方々の迫力あるお話は我々教師にも深い感銘を与えて下さいました。当日御多忙の所貴重な時間をお割きました高取利郎、沢地次雄、戸塚淳逸、雑賀昭助、藤原充雄、池田秀雄、柳沢　好の諸氏にこの場を借りて、改めて深甚の謝意を表する次第です。

扨て、今年度の求人状況は現在320社を越えて大

昭和54年度就職状況　(54・4現在)

	男子	女子	計
公務員	11	12	23
製薬企業			
研究・学術・開発	9	20	29
営業	37	2	39
病院			
研修生	8	5	13
有給	15	26	41
薬局関係	10	15	25
大学	5	7	12
自営	8	2	10
進学	3	1	4
合計	106	90	196

変な盛況ですが、今年度の傾向として製薬企業等で営業部門の採用が急増した点と女子の企業採用が多くなった点が目立ちます。唯困ることは地方の病院等での勤務志望の場合、大学では実状が全く分らないことです。従来も地方在職の卒業生に個人的には大変お世話になった例も多かった様に存じます。

お願い申し上げたいことは桜薬会の地方支部を結成して頂いて(既に出来ている所もある様ですが)その地方の状況が分るようにして頂きますと有難いと存じます。他の古い薬科大学ではよく組織化されているように承っていますが、日大の薬学科は、創設後30年にもなりますので就職のことのみならず、学部昇格を目前に控えた現在諸種の御要望、御意見などもお聞かせ頂くためにも是非お願い致したいと思います。

(村越記)

山形よりの御案内

来る昭和56年2月8日(日)に山形県薬剤師会主催による第27回山形県薬学大会が山形市で開催されます。大会中に元薬学科主任教授木村雄四郎先生の特別講演(演題未定)があります。なお、先生の歓迎会も予定しておりますので、多数の校友の参加をお待ち致します。

問合せ先

久間木国男(生薬39年卒)県衛研理化学部

TEL 0236 (22) 2518

秋元敦信(生薬40年卒)(株)イセイ

TEL 0236 (22) 7755

会費納入についてお願い　　財務委員会

会報4号に正会員会費の納入をお願いいたしましたところ、早速多数の会員のご協力をいただき誠に有難うございました。昭和55年度分として納入いただきました会費は約160万円です。しかし会報を1回発行いたしますと約110万円(送料込み)がかゝります。この事情をご賢察下さいまして、振替用紙を同封いたしますので未納の方はよろしくお願いいたします。なお、既納者にも振替用紙が同封されておりますが、悪しからずご了承下さい。納入者一覧表に誤りがありましたらお知らせ下さい。前号でお願い申し上げましたように桜薬会の運営を円滑に行うために、正会員会費年額2,000円を納入下さいますようお願い申し上げます。

1. 会費送金は振替用紙でお願いいたします。お近くの郵便局で納入して下さい。領収証は郵便局発行のものでかえ氏名は会報に掲載します。口座番号　東京　2-50025　加入者名、日本大学桜薬会
2. 出来ましたら5ケ年分(10,000)をまとめてご送金下さるようお願い申し上げます。

昭和55年度会費納入者

31 神保恵美子・青山文子・森本達也・岡村信・小山隆・外山美代子・飯田龍男・松尾美智子　**32** 鈴木英夫・森田允子・種谷えんじ・松村洋子・藤井篤範・伊勢美佐子・宮尾洋子・若松佳子・川口愛子・澤野俊彦・池上武子・石塚光二・内田実・鶴田実・進藤麗子・皿島久子・鈴木康雄・石橋義弘　**33** 星田郁代・大草晃三・佐藤雅子・浦野時明・山本肇子・江口弘・徳竹伯夫・徳竹喜子・稲垣利治・河合貴志子・金子佐知子・中沢悦子・鍛治智恵子・渡辺恵見子・山田愛子・戸巻博・中村健・伊勢忠　**34** 石川栄一・山田茂・椛澤洋三・山内盛・阿部了・高橋周七・青山静子・加藤敬一・平島宏・福崎佳久子・石井二三夫・笹野英雄・牧野一郎・鈴木信子　**35** 豊田亮三・香取悦・長谷川明・山内育子・杉崎敦子・高野俊彦・尼崎玄之助・田中みさと・佐野京子・瀬川節子・尾崎芳江・高橋富貴子　**36** 勝本行子・有田睦治・坂本寿子・粉川昌枝・長滝久枝・後藤博子・景山洋子・富田貞子・若菜茂二・小山登志江　**37** 下田富郎・寺地啓子・三日月美智子・吉岡武弘・二川博子・望月恵美子・小西一郎・伊藤善明・杉山浩子・小幡強・小原節朗　**38** 箕輪フサ子・諏訪邦子・長崎雅彦・小山己知子・小久保智弘・木村昌稔・里見巌・津村真知子・阿波克明・青木正忠・梶原温子　**39** 村瀬紀芳・小田昌紀・菅井昌子・小宮宏宣・安達倫子・高井晶子・須崎清美・南部道子・渡辺和子・広瀬慶子・城所規子・関良子・米本富美代　**40** 山内勲・五味孟・五味和江・上原弘子・木村由美子・牧村瑞恵・横井幹枝・佐藤良夫・佐藤富子・遠藤洋子・山川貴子・豊田富士子・竹田隆子　**41** 岩瀬廣・海野美佐子・井上晃宏・長谷川満喜子・糸井欣三・大河原明子・柚山正彦・小林正子・中野京子・藤川睦子　**42** 原典子・安部千明・磯田満保・原田隆子・下田祥三・山川豊　**43** 坂田絹子・菊谷由己夫・前田弘行・酒井真澄・宇田川彰子・川口時彦・相場典昭・中村欽一・中村光子・橋本和夫　**44** 楠沢清・内倉和雄・西村友則・永井由美子・新田淳子・井関知子　**45** 工藤ナツ子・柴田博・市原キミ子・太田正昭・草間貞・道祖土勝彦・藤谷典子・牧村紀子・本吉義博・増田英昭・井上禮子・有田三津代・笠松隆洋・土肥栞　**46** 篠原誠・川口喜査子・山田準子・野口幸一・岡庭優子・柴野公彦・仲祐貴子・飛田正広・中野茂・藤波典子・芦澤芳子・深田るみ子・藤田正雄・真里谷昇・岩藤章正・根本勝男　**47** 工藤隆・陰山英生・寺井康久・名塚登美子・二俣哲夫・瀬下常雄・笹川久美子・内倉美津枝・北中進・有田由美・森川邦子・柴田晶子・阿久津一宏・高本和雄・大矢千恵子・寺島正美・鈴木ひろみ・高杉晶子・矢野間道明・奥田由美・浜ノリ子・宮本俊男　**48** 桂達郎・土田直敏・大河内一紀・中嶋徳博・岩瀬京子・吉川佳江・渡辺孝三・木下美枝子・道祖土隆子・斉藤好廣・安川憲・樺島順一郎・牧原まさみ・江井広治・目文代・吉田広英・三枝良安・萬羽洋子・宮字地裕美・岡田英子・岡田泰三・矢野幸雄・渡辺大一・青木豊美・久保山昇　**49** 大竹康友・古野節夫・加古順子・伊原千秋・伴野和夫・本田佳子・佐藤恵美子・山口美貴子・香坂瑞代・鈴木敏夫・加藤隆子・越野裕・上田春子・仙石義寛・堀江道子・松村昌子・板倉礼子　**50** 竹本達司・橋本牧子・江口国子・小池勝也・立川真理子・山崎枝子・横山としよ・土井正道・阪田安雄・白髭智恵子・臼木正弘　**51** 飯塚一彦・内藤猛・森田哲生・金児明子・本橋重康・松浦晃・吉田善一・安立秀範・山本晶子・鵜川弥生・佐藤寛子・坂田正樹・菅谷尚男・片桐秀明・鈴木孝　**52** 吉田愛作・井上裕子・田中容子・高畠享・安川阿良里・水谷正樹・平野和子・高畠君子・田部井精市・種井政春・立山京子・清水智子・諸井政己・内田千恵子・青木千鶴子・小川明・奥山靖子・崎山友子・本田郁世・小花隆・富士本稔　**53** 葛岡康広・高橋光枝・三宅宗晴・百瀬明子・松永知子・荻原かつ子・沓沢真理子・木下知子・佐々木幸子・渡辺宏・細谷悦子・秋山瑞

穂・浅野重治・平野久代・加瀬恵津子・西川貞夫・宮崎英典・近藤泉・牧田功・早瀬衛以子・上田忠司・青木千勢子・内山隆　54　大橋教子・南雲恵子・相澤義雄・藤田進・宮崎由美・御園高弘・中村昭美・陳宏吉・窪田みどり・金沢厚子・白川浩司・石井千鶴・中堀克美・福原清博・近藤純江・青山幸雄・北原真実・山口明・目繁明・小川紀代美・吉岡城治・庄井みどり・名取章夫・佐々木睦子　55　青田紀子・雨ノ宮初美・青木里美・新井道也・赤堀宏・浅野久美子・秋元幹夫・石毛洋子・飯島尚志・糸永全宏・石黒珠美・井上操子・石井幸秀・石井順子・石川明・今井弘之・岩藤裕一・井上太佳子・井出紀久子・井部いつ子・石塚とし江・梅津博之・梅原郁夫・梅沢芳史・遠藤尚登・榎本隆・大宮満津子・織田咲知・大畠吉雄・小口佳子・大竹毅・岡部二三子・奥津秀樹・織間史江・小高芳夫・小沢万里・大島義英・荻野由加利・大久保善夫・荻野泰子・岡安千博・大川恵子・岡本高志・大貫良子・岡田真子・大野泰一郎・大岩雄二・川上正司・角田伊津美・鹿島珠恵・梯弘子・川代純子・加藤直美・川口加奈子・加来恭一・影山昌宏・川本修吾・河原あゆ子・喜多志津子・木戸綾子・倉田真理・栗田隆・久保田敦子・小柳節子・今野瑞穂・小松加奈・小島進・神山準一・小島敏行・古藤三恵子・小関友裕・高坂桂子・小松裕明・小林馨・小島令子・酒井香代子・佐藤理枝・斉藤令子・佐藤成美・鮫島達法・佐藤美智子・貞政恵子・柴崎勉・敷地英子・代田恵子・東海林正弘・白井由里子・島村圭二・鈴木ゆみ子・須永毅・鈴木真澄・末松隆一・須藤淳二・関昌子・芹川泰造・薗部誠・高田正子・田代菊乃・多田和恵・田中聖子・高山義教・田中淳一・高橋祐子・竜岡健一・田中裕子・田中幸彦・高橋市吉・高須賀三智子・武内克彦・高山哲・田中則子・高橋智恵子・寺田紀子・寺崎万里子・外崎誠三・豊国雅之・戸叶素美・富塚弘之・中山修一・中松みどり・中山純子・南雲恵子・仲野雅子・中村正敏・並木泉・中村珠美・中村誠治・西村彦一・野口栄三・能丸典子・野口昭司・馬場雅之・半谷容子・林新一郎・畠育子・林道子・葉梨敬枝・橋津雅宏・比嘉啓子・船津明子・藤江ひとみ・深江公美子・藤井澄子・福島信子・藤本泰嗣・福山寛信・藤井靖子・堀田優子・甫立由起子・増田明生・牧野俊猛・馬庭弘毅・増野浩・水野靖久・御園高弘・水村里行・三村祥子・向山明宏・村山充・目鳥幸一・諸角佳久・本久由香・森本宏・門馬康・森真弓・柳本妃富美・山口みどり・山崎健・山口千穂子・山田雅久・山本和彦・山田泰男・譲原康夫・渡辺俊介・渡辺洋子・和田勝彦・渡辺光子・渡辺裕子・青木京子・秋山稔・飯田昌治・岩佐淳・内立輪隆・大角武司・北川菜穂子・草薙文子・佐藤光正・佐々木裕夫・杉山順・杉山実・竹島由里子・武富和則・辻本修・堤英治・永田紳二・藤田久男・松沢玄・喜多弥生・和田千明・石田恵子・宍倉聖子・吉村ふさ子・池田篤正・江島萬成・谷島恵子・長山幸太郎・類家文明・中野圭子・山中裕和

昭和55・56年度会費納入者

33　松本幸次郎　47　吉田守　52　萩本明恒・奥村節夫　54　田辺浩司　55　飯塚直人・石綿仁・尾村美砂・関浩芳・中嶋洋・鈴木鉱太郎・大野幸夫・三木玲子・石原誠・関和優子・星原宏樹・岡田真理子・杉浦邦夫・加藤陽子・富田桃子・是永育雄・大野淳・君島光明・和気康郎・白花勝・工藤寿子・楠田容子・加藤彰裕・平井久雄

昭和55～57年度会費納入者

39　亀山伸作　51　国徳順子

昭和55～59年度会費納入者

31　鈴木隆子・横林豊子・海老沢一郎・笠井能子・原田貞亮・秋山郷子・久藤一馬・中沢文子・分林孝夫・高玲子・高橋実・河田知・井手常博・新村宗敏・木下肇・木下禎子・杉本幸美・石田隆夫　32　田中陽子・赤坂洋子・山中純雄・一ノ瀬衛・山長みどり・高木茂夫・高仲正　33　中村勝義・江畠義文・木村時子・大久保令子・金子年男・小家初夏・松井照子・白井正子・大渕洋子・小川昌保・中沢サキ子・住吉京子・小林開治・田中和子・遠藤けい・岡本昌子・松島幸江・松島俊樹・唐沢孝男　34　南部都・根本乃夫・笠原雅美・中本光子・角田吉弘・小林早苗・佐野三穂・伊藤其治・白井博子　35　古屋勝美・有澤宗久・鈴木京子・奥窪伸之・安田粿枝・大日方綾子・深谷和子　36　石井静子・佐藤文子・清水公乃・丸山紀子・清水妙子・諫山和子・石田康雄・佐野富実子・小林陽三・坂本光枝・小田八保子・前田敏晴　37　岸方子・上谷知子・山崎美江・上田民恵・高沢克昌・平林哲郎・平林照代・小山征治・藤原充雄・市川美知子・永井雅葉子・間瀬泉　38　山崎純弘・今川民子・安保万里子・尾崎聿子・井上幸子・工藤祐江・形浦和子・根本泰子・平川ミヅホ・正木節子・宮本頼章・千葉貴司・赤木素子・高松田鶴子・木村征子　39　木村秘子・高木かず子・塚本哲也・池田征子・大関康子・栗原康子・鎌田邦栄・山口久　40　松本宗彦・長谷川紀子・牧野弘子・金谷京子・真下京子・坂田達哉・栗原功・徳山靖郎・久保田慶子・森田洋子・浦野博　41　薙部勝輝・上村浩子・加納節夫・川上精一・酒井忠彦・藤田博子・中島寛之・松下孝子・木村英二・佐藤忍　42　清水慶子・川原美智子・中島斉子・水吉清恵・地曳利雄　43　小川義和・小野里和子・藍原恭子・熊本純之・大津賀睦子　44　荒尾美紗子・杉山信子・牛込久義・石崎衡治・中沢千恵子　45　渡辺好子・鈴木延子・相ひろの・坂尾孝・吉川和基・半澤晴代・菅原正雄・菅原成子・小須田利幸　46　高澤暁美・小泉宏昭・古川元康・篠崎俊行・山本哲朗・真鍋純子・佐藤光孝・富田みよ子・小儀国太郎・遠藤峯子　47　河上秀子・河合真知子・片岡孝子・国井敏信・吉田真代美・神宮まゆみ・大塚直・王博仁・真鍋博雄・小野敏江・木村たず子・安藤清子・三澤富美子　48　森棟清子・越川富比古・青木悦子・横山光子・大川成司・奥谷由美子・小川希久子・福地幹男・大畠永津子　49　山口資二・土屋洋一・平井幹廣・西岡光政・相川妙子・石垣孝彦・小野太郎・日向一正・中村久美子・芹沢典裕・坪川博則　50　藤井克裕・三浦勇一郎・梶田善昭・平野秀隆・間久雄・原田善美・寺田恵美子　51　吉川勝・吉田晴子・滝澤実栄子・加藤道子・中宮章憲・青柳雅子・青柳貞吉・横田健　52　井澤郁子・加瀬景子・皆川弓代・渡辺万喜子・加藤景昭・宗宮幸子・苅部博哲・岡田秀己・藤沢緑・井部祐子・諸澤博美・陰山幸江・原島良一・清水秀樹　53　木村万起子・川口伸一・桜山陽子・斎藤洋子・高石きく江・小池智津子・松島信行・新井喜美江・松沢清枝・岡崎恭子・石井博幸・能塚千壽枝・深沢武彦　54　磯貝純子・山縣宗明・中山純子・磯野秀和・遠田貞夫・石塚善久・入江明美・大澤道代・小澤知之・小倉明子・人見一男・玉上仁子・橋本明彦・亀渕俊彦

昭和55～60年度会費納入者

55　山本泰子・上條増富・沖昭子・渡辺智子・向山かおる・細貝猛・名倉弘明・五條隆義・中山浩一・千田好志・竹本満・風間英美・鈴木康子

以上55年11月22日現在

編集後記

本号から学部昇格を前提とした、新生“日本大学薬学部”に望むの連載が始まり。各分野で御活躍の諸兄から御意見をいただいた。このテーマについては出来るだけ多くの方から御要望をいただく予定であるが、今後は主婦、母親としての立場からの声などもぜひ載せて行きたいと思っております。本会誌は皆さんが自由に投稿出来るように特に規定を設けておりませんので、それぞれの立場から思うがままの御意見をお寄せ下さることをお待ちしております。

編集委員

大林温(1)、岡村信学(学内)(1)、笹野英雄(4)、藤原充雄(7)、坂田英明(10)、高橋繁治(13)、藤田正雄(16)、坪川博則(19)、本馬康弘(22)、

発行日　昭和55年12月20日
編集人　日本大学桜薬会事業委員会
発行人　日本大学桜薬会会長　石田隆夫
発行所　〒101東京都千代田区神田駿河台
日本大学理工学部薬学科内
電話　東京293-3201　振替　東京　2-50025
印刷所　光星印刷社　電話東京　208-4555